

悠久の名作シリーズ (21)

『江 雪』 柳 宗 元

一幅の山水画を思わせる叙景

柳宗元の詩の中でもっとも人口に膾炙かいしやしている有名な詩
といえは「江雪」と題する五言古詩と「漁翁」と題する七

言古詩である。

山水画に「寒江独釣図」という、よく描かれる構図を提供する基となった「江雪」は叙景詩の名作に挙げられている。

江 雪 柳宗元

千山鳥飛絶 千山鳥飛ぶこと絶え

萬徑人蹤滅 ばんけいじんしやう 萬徑人蹤滅す

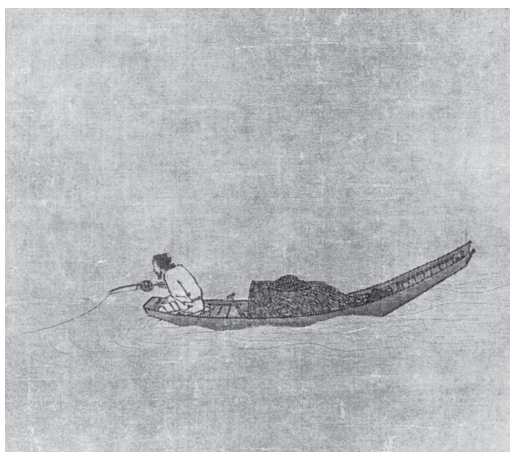
孤舟蓑笠翁 こしやう さりやう おきな 孤舟蓑笠の翁

獨釣寒江雪 獨り寒江の雪に釣る

意 解

ひっそりとした一面雪景色の中、山々には飛ぶ鳥の姿も見えず、道という道は雪に埋もれて人の足跡もない。

一 那样的小舟には蓑笠をつけた翁がただひとり、寒々とした川で雪降る中、釣り糸を垂れている。



雄大な自然の中に小さな釣翁

若きエリート官僚の左遷の涯

柳宗元（七七三～八一九）は少年の頃より秀才の誉れ高く二十一歳で進士に合格する。

当時としては大秀才の部類に入り、早くから将来が囑望されていた。その後二十六歳の時、高級官僚の任用試験に受かり集賢殿書院正字（図書編集出版）の職に就く。

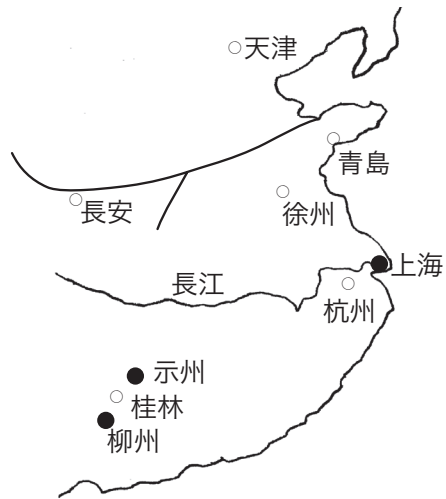
韓愈（七六八～八二四）より五年若い柳宗元は、韓愈の任官に先立つこと四年早く、中央官僚として第一歩を踏み出している。因みに一年年長の白居易（七七二～八四六）は、この時まだ進士科に合格しておらず、資格を得て任官したのは五年後である。

柳宗元の任官の頃は徳宗の時代であって、貴族・宦官の専横と庶民に対する苛酷な租税の取り立て等により、政治は腐敗の極みに達していた。

この様な政治状況の中、政治のあり方に義憤を感じ同志を集め、改革ののろしをあげたのは、当時翰林院待詔（天子の詔勅を司どる）の王叔文であった。柳宗元も同志となり、その改革に賛同し行動を共にした。

徳宗が崩御し、順宗が即位すると、その後ろ立により短期間にいろいろな改革を断行した。

それ自体は善政であったにも拘らず、あまりにも拙速すぎた。十分な根回しと周到な配慮に大きく欠けるところがあった。この為徳宗時代の保守官僚や貴族・宦官の強い抵



抗にあい、また何よりも致命的であったのは、頼りにしていた順宗が中風により不随になってしまった事で、今度は改革反対派に実権を奪われてしまった。

政治の主導権を奪還した守旧派は王

叔文に死刑、それに加担した人々に左遷の辞令を出した。三十三歳の柳宗元は、はじめ邵州刺史（地方の長官）に、しかし処分が軽すぎるということで永州司馬（刺史の次官）に左遷。十年後にやっと帰還が許されたのも束の間、今度は更に遠い柳州に追いやられ四十七歳の生涯を異郷の地で終える。

官界への門出が若く、そして順調であっただけに経歴の大半を占める左遷という過酷な運命は彼の人生の中で如何に重く大きなものであったかを示している。

散文、自然詩の代表者

中国散文の歴史に古文復興の大立者として、後世韓愈と並び称されたのが柳宗元。韓愈と同じく厳しい政治状況に

翻弄されたが、韓愈は危機をのりこえ再三復帰し、死後には「文公」の名までに奉られたのに対し、柳宗元は漂泊の果てに四十七歳の生涯を終える。

散文の「韓・柳」とともに自然詩において「王・孟・韋・柳」と世にいわれている。

王Ⅱ王維・孟Ⅱ孟浩然・韋Ⅱ韋応物・柳Ⅱ柳宗元。

鑑賞

起句と承句は「千山」と「萬径」という多い数を表わす対語を並べ、広大な景観を呈示しながら「鳥飛絶」と「人蹤滅」で極端な静寂な世界を表現している。

転句と結句の「孤」と「獨」の構成は「千」「萬」の広大な景観から「小さな舟」「独り」と大から小へと転換した見事な表現である。

「雪」が全編をつなぐ重要な一字になっている。鳥の飛ぶことが絶えたのも、人の足跡が滅したのも、みな雪のためである。山々、道々、釣り人の蓑と笠、いたるところに雪が積っている。また降りしきる雪が「孤舟」と「蓑笠翁」の文字をきわ立たせ、孤独感がひしひしとせまってきた悲愴感さえも感じさせる。

毎句の最初の文字を横に並べると「千萬孤独」になっているのはただの偶然であろうか？雪中ただ一人の「蓑笠翁」は厳寒を恐れず「千萬孤独」にも動ぜず釣り糸を垂れている。

もしかすると雪は左遷による辛苦の連続の人生を表わし「蓑笠翁」は取りも直さず、作者柳宗元であろうか。

そう考えると、極めて簡潔な叙景をおして作者の悲愴感が表現されている。また読む人をして心を滅入らせるような余韻を感じさせる。

「嵐山雨景」との比較

嵐山雨景 篠崎小竹

急雨沛然花散風 急雨沛然として花風に散り

遊人去盡水西東 遊人去り盡くす水の西東

煙雲變幻山奇絶 煙雲變幻して山奇絶

付與橋頭一釣翁 付與す橋頭の一釣翁

詩の背景、作者の境遇を考えれば、系統的でないが「釣翁」という一観点からだけ見ればあまりの違いに驚かされる。

「釣翁」は漢詩の世界では、高雅で名利を求めない脱俗の生き方の象徴といわれている。

「嵐山雨景」は名勝地「嵐山」の雨中の叙景を詠んだ詩で、にわか雨が盛んに降ってきて、吹く風に花も散り、花見客も逃げまどうざわめきの中、煙のようにたちこむ雨雲、それが山にかかって何ともいえぬ変化の妙を画きだし、晴れた景色とはまた別の絶景を展開しだした。

加えてただ一人、釣翁が超然と糸を垂れている。場所柄

の趣と動的な情景。

それに比して「江雪」は長安から何千キロも離れた未開の地、永州で詠んだ詩で、雪降りしきる寒江で物音ひとつしない静寂さと、孤独感すら感じさせるただ一人の釣翁が糸を垂れている情景。この二詩の叙景の対比はあまりにも違う詩情に詩の味わい方を考えさせられる。

参考

漁翁 柳宗元

漁翁夜傍西巖宿

漁翁夜西巖に傍^そいて宿し

曉汲清湘然楚竹

曉に清湘に汲みて楚竹を然^たく

煙銷日出不見人

煙^き銷え日出でて人を見ず

欸乃一聲山水綠

欸^{あいだい}乃一聲山水緑なり

迴看天際下中流

天際^{かいかん}を迴看して中流を下れば

巖上無心雲相逐

巖上無心に雲相^あ逐う

(テキストC21)